

立命館大学建設会

発行所
立命館大学建設会事務局
〒525-8577
滋賀県草津市野路東1-1-1
立命館大学理工学部
環境都市系事務室内
平成22年8月

第24号

会長挨拶

建設会会長

可児 幸彦

昭和四十二年卒



建設会の皆様方におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。また、日頃は建設会へ各種のご協力を賜り有難うございます。

今年はず宙から二名、さらには「はやぶさ」帰還という日本初のイベントがあったにもかかわらず、それさえ霞んでしまうほどの政変が世間を賑わしています。一方、奈良では平城遷都一三〇〇年という世界に誇れる歴史的遺産を振り返る行事も着々と進められています。今回は、我が地元の歴史を紹介し、建設会のありかたのひとつを考えてみたいと思います。

言葉の重み

環境都市学系 学系長

都市システム工学科

深川

教授

良一



私の住む岐阜県各務原市内の、蘇原清住町一丁目裏手に飛鳥田神社がある。市の広報誌によれば、飛鳥田神社は平安時代の延長五年(九二七)に朝廷がまとめた「延喜式神明帳」にその名が記載されている。伝説では六四五年の大化の改新で当時の朝廷の実力者であった蘇我蝦夷・入鹿親子を中大兄皇子(のちの天智天皇)とともに滅ぼした蘇我倉山石川麻呂(持統天皇の祖父)がこの地を治め、大和の飛鳥の地名を移したといわれている。

には、蘇原には、山田寺跡と呼ばれる古代寺院跡があり、現在も巨大な礎石(大きさ一八二cm×一三〇cm×八五cm、二重円孔式、舍利孔径、八五cm×六cm、十六cm×十五cm)が残っていることがあげられる。山田寺跡の山田は、蘇我倉山石川麻呂が大和に建立した山田寺(奈良県桜井市)とおなじ表記であることなどがあげられる。

この村国座の側には村国神社があり、ここには地域が誇る村国男依(むらくにのおより)が祭神として祀られている。いま、日本は冒頭の平城遷都一三〇〇年に沸いている。その三十八年前には古代史上最大の皇位継承の争いがあったことはよく知られている。壬申の乱である。これは西暦六七二年に行われた天智天皇の子孫大友皇子と弟大海皇子の戦いであるが、このころ大海皇子は吉野へ蟄居させられており、各務原の村国男依を頼ることになる。村国男依の活躍で滋賀県の大津まで追いかけて、ついに大友の皇子をその地で

討ち果たすが、その年大海皇子は天武天皇となる。もちろん村国男依は高位に処遇されるが、この活躍なくして七一〇年の平城遷都へ繋がらないことは明白で、我が各務原の地に住む者にとっても記念すべき平城遷都一三〇〇年である。

今年度学系長を拝命しております都市システム工学科の深川です。本学に着任しまして早くも十四年目を迎えておりまして、月日の経過の早さを今更ながら実感しております。今年度は学系でもいくつかの人事が予定されており、また二〇一二年からの学部・大学院におけるカリキュラム改革の正念場に当たりますが、気を引き締めなければなりません。学系OBの皆様および教職員の皆様のご指導ご鞭撻を頂きながら、精一杯務めさせて頂きます。何卒よろしくお願い申し上げます。

大きな貢献をされました。八木先生(現在・関西学院大学教授)は教育・研究に熱く取り組まれた他、大学、学部、学系の仕事にも積極的に参加されました。山田先生(現在・東京電機大学准教授)、井上先生(現在・北見工大助教)は、学系の教育・研究の発展に大きく貢献されました。紙面をお借りしまして、以上の先生方に心より御礼申し上げます。一方、今年度より、いづれも建築都市デザイン学系ですが、准教授・宗本晋作先生、講師・小林知広先生、助教・向坊恭介先生をお迎えすることができました。環境都市系の各学系は小規模で教員数の制約は大きいわけですが、新任の先生方とともに新たな気持ちで教育、研究、学内運営、社会貢献に一同頑張る所存です。

さて、昨年後半に政権交代という、ある意味パラダイムシフトとでもいえるべき事態が出現し、テレビなどでも多くの課題に対して活発な議論が交わされております。そのこと自体は誠に結構なのですが、言葉の重み々々を考慮させられることが増えているような気が致します。若手の論客の方々を拝見しております。議論(ディベート)が上手だなと思えます。しかし、よく聞いておきますと、質問に直接答えていないとか、上げ足を取る、煙に巻くというようなネガティブな印象を受けることもあります。弁舌爽やかだけれど、結局何を言いたいのか分からないということがあります。大学でもひところディベートは大事だから、ディベートに強い学生を作ろうと言われていた時期がありました。現在でも大学院の人材育成目標の中にプレゼンテーション能力とかコミュニケーション能力の涵養というような文言が入っております。当然重要なことであると思えます。しかし、本来、ディベートに強いということは、議論を通じて問題点の所在を明らかにし、その問題の解決方法を導いていくことが上手であるということではないでしょうか。現在は、その議論の上手さが、相手を言い負かしたり、煙に巻いたりすることに使われすぎていくように思えます。

もともと理屈の立つ人たちは何となく敬遠しているのは、私自身の生い立ちと関係があるかもしれません。私は鹿兒島の出身ですが、鹿兒島では、少なくとも私が過ごした少年時代は(小

ざかしい?)理屈で相手(特に目上の人)を負かそうとすることを「議論を言う」と言っていて、好ましくない態度とされてきました。私自身もよつとしたこととよく怒られたものでした。薩摩隼人のシンボルは西郷隆盛で、西郷さんは黙って人の言うことを聞いて、最後にはぼそっと核心を突くようなことを言う人だったようです。「男は黙って」というわけですね。

戦後の政治家でいえば、大平正芳を再評価する動きがあるそうです。大平さんは確かに雄弁ではありませんでした。大平が、しばらくの沈黙の後に出た言葉にはある種の重みがありました。何かしら哲学を感じさせたとも言えるかもしれません。宮沢喜一や後藤田正治にも同じような雰囲気がありました。翻って、現在はどうかといえます。特に政治家は説明責任というようにことを言われまして、多弁にならざるを得なくなっています。凶らずもいろんなことをさも全て分かっているように喋らなければならぬわけですね。テレビなどで政治家はそれをリアルタイムで求められます。厳しい職業だと思えます。

言葉の重みについて考えるにつけ思いつくのは、我が立命館の知の巨人・白川静先生です。白川先生は二〇〇六年に亡くなりましたが、その評価は時間とともに益々高まってきているように思えます。最近でもよく特集号が発行されますし、お弟子さんの書かれたいわゆる啓蒙本も沢山出版されています。白川先生は言うまでもなく漢字の字源を体系的に明らかにされた方ですが、漢字に限らず言葉そのものに対する解釈の鋭さ、深さは異次元のものであります。私自身も漢字に関する本が好きで、高校生の頃からよくそういう類の本を読んでいたのですが、白川先生の本を読んだから他の漢字本は読めなくなりまして。こんなに言葉や文字の意味について深く考えている人がいるのかと驚いたわけですね。最近では他大学にも白川先生のファンが増えていますが、それらの先生方に会う度に私が立命館の教員であることを羨ましがられます。

会員の声

事務系に負けるな



岐阜県建設会
部田哲雄
昭和四十一年卒

建設会会報に投稿しろとの話が第二代会長の川嶋先輩から突然舞い込んできました。さあ、「えらこっちゃー」と考え込んでしまいました。なるほど、会報があることも頭にならない人間には全く向きな次第です。(申し訳ありません！)

でも、最近、徒然に思っている事をまとめることも必要とパソコンを叩きました。

世間では、技術系不足、技術系不足と騒いでいますが、一方、世間ではどれだけ技術系を優遇しているのでしょうか？現在、上場企業の中でトップが技術系、ましてや土木系の経営者はいかほどいるのでしょうか？かつて、某商工会議所での経営者の集まりに出席した折り、「これからの日本の進むべき道としては技術系を売り物にすることが、この資源の無い日本において一番大切である。ましてや、学生の理工系離れは深刻な問題である。これを何とかせねばならない。」との発言があり、その際に当方が発言しまして、「では、本日集まりの経営トップの中にど

れ程の技術系の人はいますか？現在において、経営者トップに技術系が少ないのに、どうして我が子を理工系に勧めるでしょう。さらに、大学では授業料も高く、演習・実習も多くアルバイトに行けない状況(少々ハタタリ)において親が勧められるのでしょうか？」

で、その場はしらけました。また、小生の意見としては、良く経営トップは技術のことは判らないから技術系に任すと簡単に言いますが、我々が経営トップに成った時、經理・事務は判らないと言いつけるのでしょうか？土木の皆さん勉強しましょう。損益計算書・貸借対照表なんてたいしたことはありません。単なる数字のマジックです。我々の方が事務系よりイーハン余分に持っているのです。

さて、現実の話に戻りましょう。我が支部は今年で発足四年目のピカピカの支部です。総会でも、他支部に負けないよう来賓・先生方を写真のようにご出席頂き頑張っています。また、先輩支部の話を参考にしまして、一番良い処取りをしている素晴らしい支部です。少しでも、我が支部に関係されてい



る方は是非入会下さい。入会金は不要です。

香川県香立会 会長に就任して



香川県香立会会長
飯間秀雄
昭和四十七年卒

小笠原前会長からの突然の命により、今年から香川県香立会の会長という大役を仰せつかりました。未熟者の私が本当にこの様な役を務めることが出来るのだろうか戸惑いを感じております。

私は三十八年間の香川県庁勤めを今年の三月で無事定年退職し、地元(のべ)村上組という建設会社へ第二の職場として勤務しております。官から民へと立場が大逆転し、毎日昔の職場や他の官庁へ、仕事の依頼や情報収集する毎日で、どのようにしたらよいか解らず悪戦苦闘をしております。

現役時代にもある程度は解っていたつもりですが、この建設業界は冬の時代だと言われて久しく、受注量の減少は目を覆うような厳しい状況になっております。このことは皆さんの方がよくご存じのことと思います。国や公共機関の財政危機による所が大きいとは思いますが、もう一つは昨今のマスコミによる公共事業不要論の報道にも起因しているのではないかと考える時があります。一部の行き過ぎた行為だけを針小棒大のように取り上げて、国民こそって公共事業は悪だとの意識に洗脳しているのではないかと勘繰りたくありません。はたして本当に公共事業は悪でしょうか。道路が整備されて、その利益は誰が受けるのでしょうか。公共交通機関が整備されて、いない地方の住民にとっては、

土木屋としての 喜びと誇りを取り戻せ



京都支部
藤井英雄
昭和四十七年卒

建設会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

想いおこしますと、私が建設業界(佐藤工業)に入った昭和四十七年は、田中角栄の「日本列島改造論」が持て囃され、高度経済成長の波に乗り建設投資が大幅に伸びた時代でした。最初に配属されたのは、鉄道建設公団発注の湖西線高島トンネル工事の現場で通したんですが、残り一〇mの段階でノミ先貫通作業に先輩二名と立会、見事測量した位置にノミ先が現われた瞬間、思わず三人で涙をいっぱい溜め(私は、もらい泣き)歓喜乱舞した情景と感動を今でも鮮明に覚えています。このトンネルは、延長一五〇〇mですが、多量の湧水と破砕帯に進行を阻まれ、何本にも枝分かれした先進水抜き導坑(約三五〇〇m)を施しながら、二十四ヶ月もかかって貫通を迎えたわけで、先輩方は、土木屋(トンネル屋)として大きな壁を乗り越えたという達成感で、喜びの涙がでたものとおもいます。新入社員早々に土木屋としての喜びと誇りを目の当たりにして三十八年間、主に近畿一円(山岳トンネル工事)に従事し、土木屋としては、恵まれた人生を送らせてもらったと思っております。

最近、政権が変わり財政悪化に加え「コンクリートから人へ」と建設投資不要論が出てきて、平成二十二年度の建設投資は、ピーク時の五〇%(四十一・六兆円)まで減少すると予想されています。

今の立命館大学をみて



福井県衣笠会
三田村文寛
昭和五十六年卒

人づき合いの苦手な私は、同窓会活動を避けておりましたが、長年の罪ほろぼしと思ひ、今年度から福井県衣笠会の事務局をつとめることになりました。

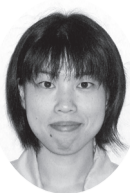
先日の建設会定例役員会に出席して、卒業以来、約三〇年ぶりに尼崎先生にお会いでき、懐かしい

思いをいたしました。

私は、福井県の職員をしておりませんが、十五年ほど前に後輩が、福井県の職員採用試験を受ける相談にきまして、色々、話をした後で面接の話になり、私が在学中には、各クラス必ず民青(民主青年同盟)に入っている学生がおり、私の下宿にもいて、日常的に色々政治的な議論を交わしていましたが、彼らが面接の時に使ったのではない言葉を言っていたのを思い出した、念のため「君は民青に入っていた。」と聞いたところが「民青ってなんですか?」と聞き返され、「立命館大学も変わったのかなあ。」と思っていました。

四年ほど前に土木学会の学術講演会が立命館大学で行われ、初めて、びわこ・くさつキャンパスを訪れ、広さと垢ぬけしたキャンパスに驚きましたが、私が学生の時に毎日のように聞いていたアジテーターの声も、雑然とした立って看板もなく、よその大学に来たような気がすると同時に、前述の後輩が聞き返した言葉を思い出したくなるほどなあと納得したことが今も思い出されます。

激動の時代の中で 思うこと



福岡県支部
宇野陽子
平成十三年卒

我が家の二人の息子は、電車が大好きである。先日、九州新幹線の新型車両「さくら」をみて、乗りたくない!乗りたくない!の大合唱で

あった。

九州新幹線鹿児島ルートは、平成二十三年三月の全線開業予定である。開通により、博多〜鹿児島間が最速約一時間二〇分となる。さらに、新大阪〜鹿児島中央間で新型車両「さくら」が直通運転すること、新大阪〜鹿児島中央間が約四時間で結ばれる。九州への観光客やビジネス利用者の増大が見込まれ、経済効果も大いに期待されているところだ。

民主党政権下で、官民連携による海外進出が推進されている。日本には新幹線・高速道路・水道と海外に誇れる土木技術がある。特に経済発展が進んでいる新興国では膨大な事業が見込まれる。海外市場に目を向ける一方で、地域に必要な地元建設業者が生き残るよう地域要件を重視した制度改正が行われている。

二極化しているようであるが、日本経済の回復のため、住民の生命財産を守る社会資本整備を衰退させないため、必要不可欠だと思われる。激動の時代に明るい兆しを見出せるよう、土木行政に携わる一員として邁進していきたい。その思いを九州新幹線の開通を楽しみにしている息子たちのキラキラした表情が、そっと押しつけている。

立命館大学における 四〇年を振り返って



立命館大学
特命教授
児島孝之

私が立命館大学に赴任したのは一九七一年で、二〇一〇年三月に退職するまで足掛け四〇年になる。この四〇年を振り返ってみよう。立命館に赴任してからの十二

年間は私にとって平和な時代であった。明石先生から、当面は材料実験と構造力学演習を担当するように言われ、比較的負担を軽くしていた。私の卒業研究の題名が「RC構造」となり、尼崎先生も修士を終えられ助手として残られ、材料系の実験室で比較的良好な環境で研究することができた。なぜ平和な時代であったのか?答えは時間の流れがゆっくりとしていたこと、多くのねじりの実験ができたこと、ねじりに関する学位論文ができたこと等である。しかしこの間、全国的に耐久性に関する問題が顕在化されてきた。コンクリートの施工の変化、ポンプの使用、海砂使用、アルカリ骨材反応の問題等である。研究分野もこれからはこのような耐久性問題へ変化せざるを得ない状況となっていた。

赴任して十三年目から学内の役職をさせられる羽目になり、一九八三年二部学生主事では二部廃止に向かう初年度でもあり、厳しい議論に明け暮れた一年であった。一九八六年夏から一年間ワシントン州シアトル市にあるワシントン大学にVisiting Professorとして滞在した。この一年間のアメリカ滞在が私にとっては大きな転機となる一年でもあった。帰国すると一九八七年学部主事、一九八九年調査委員長、一九九二年理工学部拡充移転推進委員会副委員長(一九九四年三月まで)、一九九四年BKC開学・理工学部副学部長と立て続けに学内の役職をさせていた。一九九四年に開学したBKCキャンパスには新しい学科として、環境システム工学科、生物工学科、情報工学科(情報工学科から)を一九九四年に立ち上げた。初代学部長は得丸先生(故人)。二年遅れて、機械系にロボティクス学科、電気系に光工学科を設置する。この新しい学科を新設するに当たって、文部科学省へたびたび訪問、許認可行政を知るよい経験になった。

一九九五年一月十七日五時四十七分に発生した兵庫県南部地震は生涯の中で最もショックを受けた出来事の一つであった。BKCへの移転初年度で、早朝にBKCに向け出発する予定で家内とベッドに腰をかけ、話をしていいたときに地震が発生した。はじめ二秒ほど初期微動を体感し、「地震だ」と話した直後に本震でなく二秒ほどのかなり大きな初期微動が感じられた。本震は座つていられないほどの揺れであった。ついていた大きなテレビが水平に飛んできて、約二〇秒大揺れに揺れた。西宮の家は鉄筋コンクリート構造である。コンクリート構造を破壊させる実験は大学で数多くやってきたので、破壊する状況は体感で分かっていた。もう危ないのではと思った時に揺れが止まった。二人の息子の安全を確認し、眼下を眺めると大阪から尼崎にかけては何もなかったようにきれいな夜景が見えたが西宮から芦屋にかけては真暗闇で一〇分もたたないうちに五か所ほど火の手が上がった。幸い類焼はなかった様子であった。幸運なことには午前八時ごろに電気・電話が回復した。とりあえず無事の電話を大学にいった。数日間報道番組を見ていると、よく知っている先生が破壊建造物の前で解説されていた。建築構造ではある階だけが破棄している建物、土木構造では一柱式橋脚の間部での破壊等、設計図書を見れば、断面強度の変化点であることが一目瞭然であるが、なぜか鉛直方向の衝撃的作用と馬鹿げたことを信じておられることには少々腹が立った。これも被災者の地震が下から押し上げるようなという感想の報道によるものと推察されるが、被災者の多くは寝た状態で地震を体験しており、下から地震動を受けるためにそのような錯覚を

事務局より お知らせ

■会員登録データ

立命館建設会会員の皆様の名簿を隔年発行しておりますが、そのもとになるデータベースは、皆様からのお申し出に応じて適宜更新しております。このデータベースは、年会報の送付、総会などの各種案内、また、各支部からの連絡、会費請求の事務などに利用しております。

今回送付いたしました年会報に同封されている「会員登録データ」文書上段に記載されているデータをご確認いただき、修正や変更がございましたら8月末日までに建設会事務局までご連絡下さい。

また、今年12月初旬に「平成22年度版 建設会会員名簿」を発行予定です。

会員名簿は、会費を納入いただいている会員を対象に送付させていただきます(2年に1度の発行ですので、平成21年度、22年度分の会費納入者、ならびに終身会員に送付させていただきます)。

なお、平成21年度分の会費をまだお納めでない方は、同封の振込用紙にて2年分の会費(平成21・22年度分:6,000円)を納入いただきますと、発行と同時に名簿をお送り致します。

■建設会年会費ご納入のお願い

立命館大学建設会は皆様の年会費で運営されています。

2010年度会費のご納入をお願い致します(年会費:3,000円)。

また、会費ご納入につきましては「郵便局の自動振替システム」をご利用いただくこともできます。申込み手続きは簡単ですので、すでに多数の会員の方にご利用いただき好評をいただいております。お申込みの際には、取扱郵便局「草津若草郵便局(Tel: 077-567-4050 FAX: 077-567-4120)」へ申込書の送付依頼書(様式適宜・住所氏名を記載)をFAXにてお送り下さい。毎年10月1日に会員様の郵便貯金口座から年会費が自動引き落としされます(8月末以降のお申込みは、翌年10月1日からの引き落としとなります)。詳細については、郵便局から送られてくる申込書に同封されます。

なお、銀行からのお振込も可能です(ゆうちょ銀行109(イチゼロキウ)支店、当座0000884)。お振込の際、氏名の前に10桁のお問合せ番号を必ずご記入下さい(振込手数料は申し訳ございませんが、ご負担願います)。

<p>建設会事務局</p>	<p>〒525-8577 滋賀県草津市野路東 1-1-1 立命館大学理工学部環境都市系事務室内(担当:山元) TEL: 077-561-4911 FAX: 077-561-2667</p>	<p>http://www.ritsumeai.ac.jp/se/rv/ob.html E-mail: kenstkai@st.ritsumeai.ac.jp ←メールアドレスが変わりました 会費払込郵便振替口座: 02 大阪 01080-1-884</p>
----------------------	--	---

*なお、8月13日~22日まで、大学一斉休暇となります。何とぞご了承下さい。

起こしたに違いないと思えた。現に私は座った状態で地震を受けており、テレビが水平に飛んだのを見、自分自身も横倒しになったことから横揺れが大きかったことを物語っている。このことは地震の専門の友人に後日確認できた。

二〇〇一年から学部長に就任する。課題は新学科の設置と情報学を再編拡充することであった。

新学部・新学科設置であるが、情報学を拡充して情報理工学部にする。建設環境系では建築都市デザイン学科を新設した。二〇〇五年になり学部長職も解かれ、そろそろ退職後のことでも考えなければならぬと思っていた矢先、二〇〇六年十月に役員室に来るようにとのお呼び出しが、秘書課から有り、川本理事長、長田総長、川口総長予定者から二〇〇七年一月一日から研究担当の副総長に就任するように要請された。「断れないでしょう」との発言に叱責を理事長からいただき、お引き受けすることになった。年が変わって副総長の初仕事が科学研究費の不正使用問題であった。弁護士先生のご助力や職員の苦勞の甲斐があり、関わった教員の処分をきめた。同じ理工学部の教員であり、

忸怩たる思いであった。プレス発表・文部科学省への報告、他大学の共同研究者への謝罪、後始末等二度とやりたくない仕事ではあった。

研究部では二〇〇六年度より研究高度化四カ年計画を作成し実施する年度であった。予算も基礎研究に二億円、政策的研究に五億円の予算を付けていただいていた。二〇〇七年四月より、村上副総長を迎え、先生の提案でRIGIRO(立命館大学グローバルイノベーション研究機構)を立ち上げていただいた。この機構に年間三億円の研究費を付けることとし、総計年十億円の予算規模となり、他大学と比較しても決して引

けをとらない規模の研究大学になったと思う。

立命館大学建設会の思い出



関西学院大学総合政策学部
都市政策学 教授
八木康夫

さて私事で恐縮ですが、今年度で七周年に亘る専任教員としての立命館大学理工学部での教員生活に終止符を打ちました。

立命館理工との関係は、二〇〇一年および二〇〇二年に非常勤講師として旧環境システム工学科で展開されていた建築設計演習科目を担当させて頂いたのを皮切りに、二〇〇三年からは環境システム工学科の助教授として就任させて頂き、翌二〇〇四年度からは建築都市デザイン学科へ移動しました。

在職中での建設会との関わりは二〇〇四年度から四年間会員名簿担当の学内幹事をさせて頂いたこととです。この学内幹事の四年間で多くの方々との出会いや、多くの学びがありました。

【会員名簿のこと…
建設会全体の記憶を紡ぐ装置として】

この時期は個人情報扱いの問題や、他大学等でペーパーベースの会員名簿からデジタル化した名簿が採用される等々、名簿そのものの扱いが大きく変化しようとしていた時期でもありました。当時の学内幹事でもこの話題で持ちきりでした。個人情報開示内容も会員によってそれぞれで、言葉は悪いですが「歯抜け状態」の名簿になってしまっているのではないだろうか？CD-ROM化して配布した方が情報整理がし易いのではないかと等々、本当に何度も何度も学

内幹事で検討を重ねました。結局従来通りのスタイルでの印刷を行いました。連綿と続く建設会の記憶を紡ぐものとしての会員名簿の重さをつくづく考えさせられた四年間でした。

【支部総会に参加したこと…
地域の会員連携を紡ぐ装置として】

七年間の在職中に、広島支部/滋賀支部/奈良支部の支部総会に参加させて頂きました。いずれの支部総会でも、会員の方々の大変熱い活動には、驚きと連帯感を感じました。総会後に支部会員の方々の更なる懇親を深める会(所謂二次会のこと)に参加させて頂きました。今でもその時のことが目に浮かびますが、大変楽しい時間でした。このような繋がりが「建設会の力」になっているのだと確信したことも、つい先日のことのようです。

この建設会を通しての出会いや学びは私にとって大きな財産です。今年度から、他大学に籍を移しましたが、この七周年で培われた縁を今後もさらに発展できれば思っております。また併せて、立命館大学建設会の更なるご発展を祈念しております。

最後に、岩手県盛岡市出身で鉱物学者として大変有名であった俳人山口青柳が詠んだ私の好きな句を締めくくりとして引用させていただきます。この句が発行される時期とは異なりますが、季語は「春惜しむ」でその意味は「春ははなやかだけに、この尽きることを惜しむ心」です。

人も旅人われも旅人春惜しむ

青柳

第15回 建設会総会・特別講演会・懇親会のお知らせ

2010年は、学祖・西園寺公望が私塾「立命館」を創始してから140年、創立者中川小十郎が学園の前身である「私立京都法政学校」を創立してから110周年にあたります。我ら理工学部環境都市系学系でも、土木工学科の設立から72周年を迎えました。永い歴史を振り返るとともに、新たな時代に向けて歩んでまいり所存です。建設会の皆様には、今後とも変わらぬご支援をお願い申し上げます。

第15回総会では、特別講演会で、児島孝之特命教授に「立命館大学での40年を振り返って」と題した講演を賜ります。多数、ご参加を戴きますようご案内いたします。

記

【日 時】 2010年10月16日(土) 13時30分~19時

【場 所】 京都タワーホテル [京都市下京区烏丸通七条下ル JR 京都駅正面 Tel. (075) 361 - 3212]

【会 費】 10,000円

【次 第】 13:00 受付開始

14:00 総 会 [黄鶴の間] 議事(事業報告、決算、予算等)、大学近況報告、支部活動報告等

16:00 特別講演会 [飛雲の間] 「立命館大学での40年を振り返って」

17:00 懇 親 会 [八閣の間]

- 参加申し込みは前納とさせていただきます(9月17日締め切り)。所属支部にておとりまとめの上お申し込みいただければ幸いです。同封の総会専用払込票にて、個人でお振り込みいただいても結構です。(銀行口座はご利用いただけません。何卒ご了承下さい。)

※ご不明な点等ございましたら、建設会事務局までお問合せ下さい。